

海舟越味街
 風雲とて青
 煙台標中書
 古よりと務
 毛成務とて
 海舟とて務
 街能得て眠
 氷乾とて務
 標中書川
 齊光人



森 銑三
野間光辰
中村幸彦
朝倉治彦
編

隨筆百花苑

第十三卷

中央公論社

隨筆百花苑 第十三卷

定價 二〇〇〇圓

昭和五十四年十一月十日印刷
昭和五十四年十一月二十日發行

編者

森 銑三
野間 光辰
中村 幸彦
朝倉 治彦

發行者

高 梨 茂

印刷者

山 田 博

發行所

中央公論社

東京都中央區京橋二一八―七

電話(五六一)五九二一

振替東京二二三四

©一九七九 檢印廢止

隨筆百花苑

第十三卷

目次

敘言

大谷篤藏

凡例

海陸世話日記

長屋與四郎 二三

東行話説

土御門泰邦 六一

東海濟勝記

三浦迂齋 一一五

諸國廻歴日録

牟田高惇 二五

解題

四〇五

敘 言

大 谷 篤 藏

『隨筆百花苑』第十三卷は「地誌篇一」として、紀行四編を収めた。地誌といえ、近世日本には、『東海道名所記』などの文學的地誌からはじまって、『京雀』『難波鶴』などの實用的地誌、さらには『五畿内志』や『雍州府志』のような人文地理學研究所産といえる科學的地誌まで、各地に豊富な遺産が残されて、それぞれの地方のいわば百科全書的な知見を與えてくれる有難いものである。その地誌類に分類される中で、作者の旅中の見聞、それに伴う感懷に讀者が共感でき、旅程の進展につれて次々に展開する新しい世界、珍奇の事物に目を瞠る紀行という一群が特に讀み物として興味がある。紀行にも文學的紀行、たとえば芭蕉の『おくのほそ道』のごとき、橘南谿の『東西遊記』のごときものもあれば、名もない市井の知識人風雅人の、旅に出た氣易さから風流心を觸發されて、見聞を録し、所々で下手な句や歌をひねって書付けた無數の群小作品がある。紀行としての興味よりも、むしろ芭蕉文學の精髓ともいべき『おくのほそ道』はしばらく措いて、かかる群小作品の類は讀んでもちっとも面白くな

い。まことに芭蕉のいうごとく、

其日は雨降、晝より晴て、そこに松有、かしこに何と云川流れたりなどいふ事、たれ／＼もいふべく覺侍れども、黃奇蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ。

である。紀行の内容表現に、それぞれの作品に特異な奇らしさ新らしさが感取されなければ、決してわれわれの讀書欲を満足させるものではない。この意味でここには、それぞれにすぐれた特異性をもつ異色の四篇を採上げた。

『海陸世話日記』は、寛文八年加賀吉崎の長屋某が材木買入のため海路南部地方に赴くが、俄の暴風に吹流され八戸附近に漂着、折角破損を免れた船を、所の名主代官の頑冥から無體にも取毀たれてしまう。その係争公事の決着のため陸路江戸へ旅立つ。平泉・鹽釜と『おくのほそ道』の旅程を逆に上つて江戸に着く。二ヶ月餘に亙る公事に一應の決着を見て東海道を経て歸國するという旅である。もとより風流遊山の旅ではなく、思いがけぬ變事から餘儀なくされた旅ではあるが、結構旅中の見聞を楽しむ所も見え、東海道に入ると急に文體が縁語掛詞の道行ぶりに替る所など興味がある。芭蕉の旅に先だつこと二十年、『おくのほそ道』を念頭に讀み比べるのも一興であらうし、作者の實際した災害、それに基づく係争公事の顛末が詳記されている所も大いに讀ませる所である。

『東行話説』は、寶曆十年將軍任官の宣旨を携えて東下した勅使に隨行した土御門泰邦卿の旅の記である。ところでこのお公卿さん、なかなかどうして一筋縄では行きかねるお人、その才氣煥發に洒落のめす所、詳しくは本文に即いてとくと御覽いただきたい。その才氣が本書を稀有の名品としている。各種

の文體を驅使した小憎らしい程の器用さ、隨所に見られる食味談にうかがわれる、いかにも美食家グーリム的な皮肉。このエビキュリアン泰邦卿に、貧乏はしていてもさすが千年の傳統をもつ京都縉紳家の都會人らしい豊かな趣味性を見ることができ。まさに本巻中の白眉といふべきである。

『東海濟勝記』は前記『東行話説』とほぼ同時代ながら、この方はぐっとまじめである。播州高砂の歌人三浦迂齋の旅行記、まず東海道を江戸へ、更に日光から那須・淺香山・松島・象潟と、奥羽の歌枕を訪ね、北陸路を歸途とする。當時としては大旅行であるが、また群小俳人の多く辿った「おくのほそ道コース」に似る。ただ各地で種々の人物を訪ねる。江戸で平賀鳩溪を訪ねて物産會の記事などあることが興味をそそる。前書に比して、彼は風流洒落、此は實直眞摯、好對照をなすものの如くである。

最後の『諸國廻歷日録』はまたガラリと變つた武者修業廻國記。義理にも紀行とは申しかねる非文學的な旅行記で、何しろ作者は文雅の嗜みなど少しもない武邊一方の鍋島武士。藩命により劍術修業のため二年間諸國を廻歷する。當今ならば、さしずめ二年間の内地留學とでもいふべき所か。時恰も嘉永安政年間、諸國高名の劍術者の道場を巡るが、その土地土地の祭禮行事などにこの武邊者のナイーブな觀察が、却つて詳細に實を傳える。ただたどしい文脈と途方もない當字に、當時の平均的武士の教養の程度がうかがわれて、これ又興味がある。

凡 例

一、收録にあたつて、作品の配列は成立年順とした。

一、本文については、それぞれ信頼しうる善本によって校訂し、疑點については他本を参照するなどして補正に努めた。

一、漢字は正字體を使用し、古字、別體字、俗字などは通行の字體に改めたが、底本の字形をそのまま残す必要のある文字はそのままとした。

一、底本に句讀點は施されていないが、読み易いように適宜これを施した。また漢文の句讀點、返り點、連字符についても必要に応じて補ったものもある。

一、原則として送り假名、振り假名は底本のままとしたが、濁點は、読み易いようにこれを補った。但し時代的な特殊表記はこの限りではない。

一、假名の古體、變體、合字などは通行の字體に改めたが、平假名、片假名の別は底本通りとした。

一、原則として脱字、衍字、誤字、宛字は底本通りとしたが、その作品の特殊性を考え、固有名詞や明らかかな誤字などは訂正するか、または行間に正しい字を（ ）で添え、不明の場合は（ママ）とした。本文中の校訂者による注記は「」で示し、本文と區別した。

一、底本の蟲喰い、破れ、汚れなどで判讀不可能の場合は、推定字数だけ□□を重ねて行間に注記し、推定可能の場合は、行間にその文字を示した。

一、底本に改行のない場合は必要に応じて改行した。

一、底本の簡単な書入れや注は本文の該當箇所へ（ ）して挿入した。

一、「東海濟勝記」中の神、天皇、將軍などの語に、闕字、平出のある場合はそのままとした。

一、各卷に「解題」を付し、作品及び著者の解説、校訂上の注意事項などを記した。

地誌篇 一

責任編集 大谷篤藏

海陸世話日記

長屋與四郎

